



Book Talk

編集・発行 海南高校図書館
創刊号 2009. 01. 19.

本が読めないようなつまらない人生はおくりたくない。



今、図書館に静かな嵐が吹き荒れている。

「まだ入らないの(ˉ;)?」「先に借りられてしまった(ˉ_ˉ)」

「返却はいつ?」「誰が借りてるんだ? 催促に行くから」

伊坂幸太郎の本の貸し借りをめぐるやりとりだ。

ブームの火付け役は、「校内を颯爽と闊歩する」といえば誰もが思い浮かべる英語科の堀先生。そこで、堀先生に伊坂幸太郎作品に対する熱き思いを綴っていただいた。

20世紀最高の作家が**太宰治**だとすれば、21世紀最高の作家は**村上春樹**。長年そう信じてきたが、近頃私の読書熱を上げる作家がまた一人——伊坂幸太郎だ。

読み始めたきっかけは、図書館に置いてくれていた新聞のインタビュー記事だ。「こんな人知らない」と思いつつ視線を移した返却ラックに伊坂幸太郎作品2冊を発見。シンクロシティ*¹には従うべきかとその『グラスホッパー』『魔王』を借りる。一晩で読む。『チルドレン』『砂漠』と続き、短編も続編も長編も、刊行されている伊坂作品は読み尽くした(現在図書館に最新刊『モダンタイムス』をリクエスト中)。ちなみにトップスリーは『ゴールデンランバー』『グラスホッパー』『アヒルと鴨のコインロッカー』。これは多分に個人的な好みなので、あなたのランキングも作ってください。

伊坂作品の好きなところは ①語り口の軽み ②字面上の遊び ③登場人物の個性 ④横のつながり 以上4つだ。

① 一種異様といってもいい舞台設定や人物設定は多い。多いにも関わらず「そういう物語なのだ」と引きずり込まれ納得させられている。読んでいて情景が目の前に浮かぶのだ。リアルでないはずの世界が紡ぎだされるときに心に迫るリアルさは、テンポの良さと「ノリツッコミ」と呼んでもいいほどの押し引きの力加減によるものだろう。爽快な軽みが際立つのは地獄の深淵に見入られる重苦しく残酷な描写もあるからだ。重厚さに支えられた軽妙さ。これがまず魅力だ。

② 場面や視座の切り替えに、伊坂幸太郎は小さなイラスト*²を使うことがある。印鑑であったり人の絵であったり。「小ネタ」と言ってしまうとそれまでだが、そういうディテールにもあまさず力を注ぐプロ精神が私は大好きである。また、何行かを続けて同じ語数で終わらせていることもよく見かける。偶然のように見えるが必然だ。なんといってもこの世に偶然はない。

③ 今一部で流行っているのが、伊坂作品の登場人物を「○×君よなあー」とあてはめて遊ぶこと。キャストを揃えて文化祭で劇をやりたいぐらいだ。トップスリーは『蟬(グラスホッパー)』『黒澤(ラッシュライフ)』『春(重力ピエロ)』。『響野(陽気なギャングシリーズ)』も捨てがたいのだが。特別賞は『桜(オーデュボンの祈り)』。

④ 伊坂作品はそのひとつの物語だけでも十分楽しめる筋立てがいつも用意されている。その物語の中で重要なフレーズやモチーフは何度も登場し、時には物語の境界をも越え、他の伊坂作品を侵食する。そのつながりを見つけるのもまた一興だ。他の作家の引用や音楽も随所にちりばめられ、思わずそちらへの食指も動かしてしまうほどの筆致である。実際今、伊坂作品に登場した宮沢賢治とボブディランにはまっている。

何度も読み返す本も多い。なぜか? おもしろいからだ。本が読めないようなつまらない人生は送りたくないし、つまらない本

を読むような余裕のある人生ではない。心奪われる本に出会うたび、その邂逅に感謝する。流麗な日本語を操る作家が自分と同じ言語を母国語に持つことを感謝する。読書は私にとって現実逃避の手段であると同時に実際生活への糧を注入する大事な大事な手段である。これからも伊坂作品は何度でも読むだろう。

【編集部注】*1 同時性、同時発生 *2 や や 等

さて、そんな伊坂ワールドへの堀先生からの招待状として、先生の心の琴線に触れた「名文」を作品の刊行順に選んでくださった。運良く貸し出し中でなければ、いずれの作品も図書館にあるので、一読すればその「名文」たるゆえんを感得することができるはずだ。

~~~~~  
ジャングルを這う蟻よりも価値のある人間は、何人だ(『オーデュボンの祈り』)

世の中は真っ暗闇で、手を伸ばしても訳が分からね

え。壁かと思えば崖だ(『ラッシュライフ』)

ロマンはどこだ(『陽気なギャングが地球を回す』)

楽しそうに生きてれば、地球の重力なんてなくなる(『重力ピエロ』)

シッポサキマルマリ(『アヒルと鴨のコインロッカー』)

大人が恰好良ければ、子供はぐれねえんだよ(『チルドレン』)

死んでみたいに生きてたくない(『グラスホッパー』)

仕事は本気でやるに決まっている(『死神の精度』)

世界を変えてやる、くらの意気込みがなければ、生きてる意味なんてねえよな(『魔王』)

今、目の前で泣いてる人を救えない人間がね、明日、世界を救えるわけがないんですよ(『砂漠』)

死に物狂いで生きるのは、権利じゃなくて、義務だ(『終末のフール』)

四の五の言わずに勝負しろ(『陽気なギャングの日常と逆袭』)

合点承知(『フィッシュストーリー』)

人間、生きててなんぼだ(『ゴールデンランバー』)

~~~~~  
最新刊『モダンタイムス』にはどんな「名文」が散りばめられているのか… ぜひあなた自身がひもといて探し出してみしてほしい。新しい世界が目の前に広がることを期待して。



つまらない本を読むような余裕のある人生ではない。